



開村から30年

かつて風張峠を越えて五日市へ続く甲州古道。小河内側起点だった岫沢くさざわと日指集落ひさしの跡地に「山のふるさと村」が作られた。対岸の奥に見えるのが石尾根。



ソバ打ち体験

「山のふるさと村」に来させえ！

山のふるさと村は、都民の健全なレクリエーション需要に対処するため、自然利用の拠点として奥多摩湖畔に大規模な集団施設地区を整備し、東京都内に残存する貴重な自然を広く都民に親しんでもらうことを目的に平成2年(1990)10月末に開園した東京都立自然公園施設です。

自然豊かな山々、奥多摩湖に囲まれた30.2haの園内には野営場(テントサイト・ケビンサイト)、ビジターセンターやクラフトセンター、レストランも併設し、奥多摩の自然に親しみながら、自然や歴史について学んだり、自然体験プログラムに参加したり、キャンプやクラフトを楽しんだり、思い思いの楽しみを満喫することができます。

年間を通じての主催イベントでは、地域の特性を活かした治助イモの種まき・収穫体験をはじめ、地元料理作り体験、地域の伝統芸能や歴史、文化にふれるツアーなどを企画し、また、恒例である山ふる春・秋・冬まつりでは、獅子舞の上演、特産物の販売、郷土料理ふるまいなど、毎年大勢の方にご参加いただき、盛況を得ているところです。

皆様に親しまれている山のふるさと村は、おかげさまで昨年30周年という節目を迎えることができました。毎年年間を通して多くの皆様にご来園いただき、宿泊・自然体験・クラフト体験などの施設を利用され、楽しんでいただきましたことに心より感謝申し上げます。

昨年来、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う休園や人数制限等を設けての開園となっしまい、来園を楽しみにしている利用者皆様にはご不便をおかけしています。一刻も早い新型コロナウイルス感染症の収束を願い、これからも皆様のご来園をスタッフ一同お待ちしておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

奥多摩町観光産業課山のふるさと村村長 木宮則徳

奥多摩山歩きワンポイントアドバイス ～コロナ禍を経ての山歩き～

一番ツツジから桜へとこの奥多摩の地にも春の息吹が感じられる今日この頃です。駅前では恒例となっている山開き式と登山の安全祈願祭が執り行われていますが、どこことなく例年と違って感じられるのは筆者の気のせいでしょうか。

昨年度は私たちの山歩きについて、大きな変革を余儀なくされた一年間でした。コロナ禍は過ぎつつありますが、ここではこれから始まる新しい時代の山歩きについて共に考えてみたいと思います。

I. 山歩きのスタイル

満員電車に乗って出かける集団登山は見直され、三密を避けるための工夫が求められています。従来から日本山岳ガイド協会で定められている顧客10人に対してガイド1名や、日本旅行業協会の引率者2～3名に対して顧客20～25人等のガイドレシオは大きく見直されなければならない状況です。海外でもこの冬、例えばスイスでは顧客4人に対してガイド1名という厳しさです。

幸い奥多摩では、観光協会の主催するハイキングや登山また、地域振興財団の主催するイベントなど従来から案内人ひとりに対して、参加者の人数が7人を超えることはないよう企画されてきました。

当然参加者相互間の間隔についても、互いに手を伸ばして触れない距離(フィジカルディスタンス)が求められます。特に登山の前後や昼食時の密については、互いに意識して避けなければなりません。

II. 乗り物や山小屋での対応

交通機関では昨年からの事業者がそれぞれ密を避ける工夫に取り組んでいます。課題は利用者の側にも、例えばラッシュ時間帯を避ける等の行動が求められています。

山小屋では定員の大幅な削減が図られていることから、登山者は必ず事前予約を徹底し、個人用インナーシーツの持参はもとより、消毒薬やゴミ持ち帰り用のチャック付きビニール袋を用意するなど山小屋に負荷を掛けたくない心掛けが大切です。

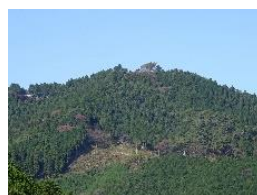
III. 体力の増強と事故防止

昨年度は特に外出自粛の呼びかけや、公共施設の閉鎖など、トレーニングの機会が減少したため、フレイムとまではいかないまでも、多くの方々に従来と比較して体力低下が見受けられるのも現実です。このことが原因でちょっとした躓きや踏み外しから

大きな事故にも繋がりにかえりません。

ひとたび事故が起きると、消防や警察はもちろん近くの山小屋関係者にもコロナの疑いから、大変な負担が強いられます。従って絶対に事故を起こさない配慮として、登る山に相応しい体力を充分につけてから挑戦したいものです。

自宅から日帰りのできる、例えば日の出山や本仁田山また、高水三山や大岳山等日頃から自分に合った方法でトレーニングを重ねましょう。事故防止はもちろん自分たちが参加するイベントの同行参加者にも迷惑を掛けたくない心掛けが大切です。



(日の出山)



(大岳山)

IV. 自然に目を向ける山の楽しみ

一方今回のコロナ禍が私たち山の愛好者に教えてくれたものは何かを考えてみると、人それぞれ受け止め方は違って、ひとつ言えることはゆとりではないでしょうか。密を避け少人数でゆったりと山歩きをすれば、そこに見えてくるものは自然そのものであり、地形や地質に基づく景観とそこに生きる植物や動物たちではないでしょうか。

例えば、上に挙げた写真の二つの山を歩いてみるとそこにはただ景観が異なるだけでなく、生えている樹木も違えば、私たち人間との関わり方も大きく違っていることに新しい発見があります。

普段何気なく登っていた道にも季節ごとの草花が茂り、そこに生育する生き物たちの営みが見えてきます。私たち人間が自然の一員であるからこそ、愛おしい生命の息遣いや、自然の変化を敏感に感じる事が出来るのです。

V. 新年度の目標

友の会の皆さん方には新年度のイベントカレンダーが既に届いていることかと存じます。はやる気持ちは理解できますが、長い冬眠から覚めたばかりの春先は特に徐行運転から始めたいものです。

個人差はあるにしても、一か月の休業はこと山登りに関しては二ヶ月の慣らし運転が必要だ言われています。

忠実にトレーニングを続けていけば、夏頃迄には奥多摩の三大急登にも挑戦が可能となるでしょう。自身の生活を見直し、今年目標設定にこの駄文が何かしらの拠り所となれば幸いです。

ガイド 富士 光男

～ 行って来たあよ ～

イベント No.28 ^{としいやま} 砥山から山のふるさと村
2020年11月25日(水)
晩秋の砥山ハイキング

砥山って何処にあるのかな。集合五日市駅で、都民の森から登るのだから標高1302メートルでも歩くのは高低差にして300メートルほど。ならば何とか歩けるだろう。でも、しばらく山を歩いていない七十三歳の私は心配だ。しかも、25日当日は朝から雨模様。それでも、五日市、檜原を抜けて走るバスの車窓の秋景色は心地よかった。

都民の森から登る。針葉樹の森がやがて広葉樹の森に変わる。観光協会のスタッフが「これはリョウブ、これはオノオレカンバ。斧が折れるほど硬い木だ」など解説してくださる。道は急だが整備されていて登りやすい。周囲の眺めは素晴らしいはずなのに霧に包まれて見通しがきかない。1時間程で砥山山頂。山頂からの下り道には落ち葉がうずたかく積もりかき分けかき分け進んだ。やがて風張峠。昔、小河内の人々はこの峠を越えて檜原から五日市へ荷を背負い、あるいは馬の背に積んで往来していたと聞く。その地を踏めたと思うと感慨深い。峠近くで昼食を取り、山のふるさと村へ下る。運良く2日ほど前から浮橋が通行可能となり予定より早く対岸のバス停に到着。観光協会お手配の増便のバスで帰路についた。

ご案内、バスの手配等お世話くださったスタッフの方々、ご一緒してくださった友の会の皆さん、おかげで楽しい山歩きができました。

会員 澤井 美津枝



風張峠と馬頭観音(標高1,146m)

柳田国男と田山花袋

明治三十二年(一九一九)柳田国男は夏、田山花袋は冬、奥多摩を訪れた。

かねてより親友田山から、奥多摩の魅力について聞き及んでいた柳田(当時二十四歳東京帝国大学在学中)は、鳩の巣から、標高六〇〇mの峰集落に大尽福島文長を訪ね二泊する。当時、ここから十六里(約六十四km)東南の羽田の沖が見えたという。

彼は文長から狩の話(イノシシ、熊、カモシカ)を聞き、記念にカモシカの角で作ったパイプを貰っている。十年後の処女出版『後狩詞記』は峰での見聞が記憶の伏流水となって結実したものと見えよう。最盛期昭和初期には十六軒を数えた峰であったが、きびしい秘境の生活苦には勝てず昭和十五年(一九四四)には草分けの福島家(文長の長男定彦)が下山し、あと継続的に村を離れ、福島儀左衛門の昭和四十七年(一九七二)をもって完全に廃村したのである。

田山花袋は明治三十二年九月(当時二十八歳)出版社博文館に入社、十二月十九日同社の取材出張で画家片山春帆(しゅんぱん)、写真家斎藤柴白を伴い、多摩川水源を探訪する。前回明治二十七年四月(一九九四)果たせなかった日原鍾乳洞を見学(この日の昼食は旧家原島家で取る)あと雪の中を丹波山、一之瀬、落合と泊まりながら柳澤峠を越え、塩山、甲府を経て鯉沢(かじかざわ)から乗船。富士川を下って二十六日東京に帰る。

訪町一〇〇周年の記 熊本学園大学名誉教授 牛島盛光 撰

一九九九年十月二十三日

注『後狩詞記』(のちのかりことばのき)

※原文書式を尊重し縦書きとしました

奥多摩樹木雑話

～ 熊沢林道散策 ～

「風冴ゆる」冬から「風光る」春へ（辰濃和男）。早春の大丹波熊沢林道を歩きました。林道に沿った森は、一面褐色の冬におおわれていましたが、ところどころにもっこりとしたスギ、ヒノキ、モミ、カヤなどの稚樹が、濃い緑の点描をつくっていました。その姿から、丈を伸ばすより枝を広げてできるだけ沢山の光を取り込もうとしている彼等の意図がうかがえました。

木々の冬芽をのぞいて回りました。葉痕^{*}をえり巻きのようにまとったヌルデ、長めの円錐形のからだを筋ばらせているウラジロガシ、葉脈を浮き立たせた灰褐色のからだをねじり開こうとしているムラサキシキブ、早春の花を期待したアブラチャンは、4ミリほどの長さの葉芽^{ようが}のわきから、未だ小ぶりの丸い花芽を振り挙げていました。いずれもが、冬の寒さによって眠りを覚まし、息をこらして春の光の呼びかけを待っているようでした。陽あたりの良い崖ふちで、ウメがほころび始めていました。

「ウメは花を、サクラは木全体を見る」ということですので、花を間近で見つめてみまし



た。赤褐色の芽^がリンを押し開く純白の若い花びらの美しさはさることながら、つぼみをY字形に引きさいてのぞくがく片の黄緑色の筋が鮮やかでした。

「春は空から、さうして土からかすかに動く」（長塚^{たかし}節）。カットは、私の目にとまった「かすかに動く春」の寸描です。小さな自然に近づいて見ることで、春を大きく感じる事ができました。

※葉痕： 落葉後、枝に残った葉のあと

橋上 一彦

奥多摩の野鳥

～ かしこい鳥 カラス ～

ハシブトガラス：スズメ目/カラス科

くちばしが太く額が盛りあがる

鳴き声：カーカー

ハシボソガラス：スズメ目/カラス科

くちばしの形が円錐状で直線的

鳴き声：ガァー、ガァー

今回はカラスを取りあげました。カラスの知能はおそろし、とにかくかしこい。カラスがゴミ漁りをするのはよく見かけますがこれは自然界では大変役立っています。生態系のなかでは動物などの死骸は不要なゴミではなく資源です。カラスはくちばしで死骸に穴をあけバラバラにして非力な動物が利用しやすいようにします。カラスのおかげで死骸の分解は早まって生態系に還元されます。只、人間の出すゴミ漁りは少々迷惑ですが。

カラスは遊びます。例えば滑り台を下ったり、風によって転げ回ったり、電線や木の枝にぶらさがったりといろいろ工夫して遊びます。その延長線で見かけるのが、自分より体の大きい鷹やトビを追いかけている姿です。これは本気ではなく遊びの一種のようです。

その他に、カラスのかしこさの1つにかたい殻のオニグルミの

中身を食べるために高所から地面に落としたり走る車にひかせたりしてオニグルミの殻を割って中身を食べるという行為です。

最後にカラスのかしこさの1つ、人の顔を識別し記憶する事が出来る事です。これはおそらくカラスにしか出来ない事だと思います。まだまだカラスのかしこさがあります。



ハシブトガラス

絵 大澤新次

ガイド 畑 幸夫

「奥多摩山里歩き絵図」を歩く

大丹波川流域の春

ご紹介するコースは、当観光協会春のイベントとしては、リピーターナンバーワンクラスです。

ミツバツツジをはじめ、桃も桜もレンギョウも



ミツバツツジ

一斉に咲く風景をお楽しみください。また、木々の花だけでなく、ニホンタンポポやタチツボスミレなどの野草を楽しむ絶好の機会でもあります。

この地域は、絵図を片手に一人でも歩ける安心コースです。しかし、山里歩きを侮っては困ります。危険と楽しみは、紙一重。山中や谷への踏み入れは危険を伴います。

では、もう少し具体的にコースを紹介します。

熊沢林道を歩く

川井駅の石段を降りたら、右折してください。絵図にないコースですが、川井グリーンヴィレッジ方面へ。道なりに大丹波川を遡ります。右も左も、そして上も下も木々や野草の新芽や花が目飛び込んできます。



フサザクラ

住宅地を抜けると、熊沢林道に入ります。ここでは、フサザクラ、アブラチャン、キブシ、イタヤカエデなどのユニークな花。地には、タチツボスミレをはじめ、エイザンスミレやマルバスミレ等が迎えてくれます。

右側のやや湿り気がある所にハシリドコロがあります。ただし、有毒植物ですから要注意。

元民宿「熊沢荘」を過ぎると川べりに出ます。クワガタソウ、コチャルメルソウ、ユリワサビなど、野草の花がにぎやかになります。ここからは、釣り人優先の溪流釣り場のエリアに入りますので静かに花や緑を楽しみましょう。釣場管理棟の先

には行けませんのでアメニティトイレ前で小休止。

バス通りに出て北川橋を渡り、輪光院へ向かいます。裏山は、たくさんのミツバツツジが見ごろを迎えています。ツツジの中を登り、ツガの大木の根元まで登ってみてください。



エイザンスミレ

バス通りに戻って、更に進み、北上橋へ。余裕があれば、真名井橋まで行けます。戻って青木神社から大丹波集落が一望できます。一部、コースをはずれますが、薬師堂方面に向かい、釜飯屋「なかい」を経て南沢橋へ。しばらくバス通りを歩くと、左手にカツラの大木があり、地元では、「しょうゆの木」と呼ばれています。

ハイライトコースを歩く

竹の花バス停から右手の坂を上ると多摩川に架る奥多摩大橋を見下ろせる展望地に出ます。

蟠竜院や八雲神社方面へ向かう山里の道は、百花繚乱の始まりです。民家の桜や古い石垣に沿っ



ユキヤナギの道

て続く真っ白な滝のようなユキヤナギ。蟠竜院と元古里中学校付近は、桜、ミツバツツジ、レンギョウ。足元を見るとヤマブキソウやウラシマソウなど、山里歩きのハイライトコースです。

なお、『来させえ・奥多摩53号』に大丹波川流域情報が載っています。あわせてご覧いただければ幸いです。

※今春、奥多摩山里歩き絵図がリニューアルされました。この機会に改めて奥多摩町内を歩いてみませんか。21枚の絵図のセットは、駅前の観光案内所や町役場のカウンターに置いてあります。無料で差し上げていますのでご利用ください。

ガイド 岡崎 学

「名人・達人観光ガイドの会」ガイド紹介

- ① 氏名 ② 現役時代の仕事または今現在の仕事 ③ 出身
 ④ 現住所 ⑤ 趣味、特技 ⑥ ガイドになったきっかけは？
 ⑦ 今までガイドをして嬉しかったこと、良かったと思ったこと
 ⑧ ガイドをする時いつも心がけていること

① ^{よこほり}横堀 ^{かつひろ}勝弘 ② 商品企画 ③ 昭島市
 ④ 昭島市 ⑤ 山登り、ゴルフ、そば打ち ⑥ 定年後奥多摩ガイドの2期生募集をしていると聞き応募しました ⑦ とにかく奥多摩の山に、たくさん登れたこと ⑧ お客様の安全について、自分または仲間が事故にあったこと、危険にあったことなど具体的に話をして注意喚起することに心がけています

① ^{しまさき}島崎 ^{やすこ}やす子 ② 自営業 ③ 飯能市 ④ 青梅市 ⑤ ゴルフ ⑥ 現在の会長原島さんに誘われて ⑦ 山の先輩に囲まれていろいろな知識を吸収してお客様に還元できること、お客様が頂上に立ったときの感動の笑顔が見られたとき ⑧ 余裕を持って安全に歩いて奥多摩の自然を楽しんでいただくよう心掛ける

① ^{おおさわ}大澤 ^{しんじ}新次 ② 金融機関 ③ 奥多摩町 ④ 奥多摩町 ⑤ ライダー、ゴルフ、詩吟、ノルディックウォーキング、ソフトボール、溪流釣り、お面彫り、山葵作り ⑥ 友の会受付をされていて、ガイドに誘われる ⑦ 山野草に詳しいお客様と歩いていると自然に覚えていくのが楽しい ⑧ トレイルランニングをしていた時は、がむしゃらに走っていましたがガイドになってまわりの景色を楽しみながらお客様に怪我のないように気をつけるようになりました。

大岳山からの眺望

4月27日

イベントNo. 4 大岳山（奥多摩三山）

山頂での山座同定の参考にしてください。



大岳山から

春から夏 奥多摩山歩き イベント案内

令和3年4月 から令和3年6月

No. 4 4月27日（火）大岳山（奥多摩三山）

奥多摩駅から鋸山を経て大岳山へ 眺望最高

No. 5 5月7日（金）棒ノ折山 バス代込み5,000円

名栗湖から白谷沢コースを登り山頂の山桜で御花見

No. 6 5月13日（木）山里歩き 小丹波から棚沢へ

戦国時代の建立とされる阿弥陀堂をはじめ奥多摩の歴史に触れてみませんか。

その他里山歩きでは大氷川、常磐など各地の歴史に触れるコースを用意しています。

知って歩けばもっと楽しい！

登山のイベントはその他に5月、雲取山、三頭山、天目山、6月に笠取山、鷹ノ巣山と予定しています。奥多摩の山を楽しんでください。詳しくは奥多摩町観光案内所にご確認ください。

狛犬

神社の入り口に置かれ、悪い気や悪霊などから本殿や本堂を守るための魔除けである狛犬ですが、いろいろな形、表情を持っています。下の写真はどこの神社でしょうか？ ガイド 小峰一郎

ヒント 奥氷川神社、愛宕神社、七ツ石神社、白髭神社、大岳神社



次号発行予定：令和3年7月15日

発行 一般社団法人 奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210

電 0428-83-2152 FAX 0428-83-2789